

[シンポジウム：実践からの構築を目指して]

1. 家族システム看護 CFAM・CFIM を実践しているなかでの学び

山口県立衛生看護学院

戸井間 充 子

はじめに

家族システム看護とは、「システム理論」「家族療法」「看護」の主要概念が統合されたもので、1970年代後半から看護界で発達した。この家族システム看護は、家族を一つのケアユニットとしてとらえ看護していく。又、CFAM (Calgary Family Assessment Model: カルガリー家族アセスメントモデル)・CFIM (Calgary Family Intervention Model: カルガリー家族介入モデル) は、カナダ、カルガリー大学 Wright 博士らによって開発されたもので、看護婦が家族全体を CFAM を用いて家族員間の関係性をアセスメントし、CFIM を用いて看護介入を行うものである。

実践の中よりの学び

1. 日本の家族に受け入れられるか?

日本は閉鎖社会である、生活習慣が違うなどの理由によりカナダで開発されたこのモデルが、日本の家族に実践出来るのか? という疑問が湧き起こってくる。しかし、実践を積み重ねている今、実感していることは、家族の関係性に焦点を当て、家族自らが変化していくことをゴールとしているこのモデルは、日本の家族に十分に活用出来る。

2. 家族インタビューの効果

「看護は実践の科学」である。実践の中より理論が生まれ、その理論を用いて実践していく。この循環のなかで私たちは機能障害を起こしている家族に

CFAM・CFIM を用いて看護している。多くの家族にインタビューした結果、家族は意外とコミュニケーションしていないことに気づく。家族を一同に集めてインタビューすることにより、家族員は自ら解決し変化していくことや、家族員の信念は変化するということを手応えとして感じている。又、家族みずからが起こした変化は押しつけでないだけに長続きすることも実感している。家族員の関係性に焦点を当て、家族自らが変化していくことをゴールとしているこのモデルは「生活者としての家族」を看護していくときに非常に有効である。

3. インタビューは難しい?

インタビュー技術の上達は実践を積み重ねることだと考える。家族インタビューを行った1事例1事例のテープやVTRを逐語的に記録におこす。そのプロセスより、改めて患者・家族員の信念に気づいたり、変化を起こしている家族員に気づいたりする。パトリシア・ベナーが言っているように、経験を積み重ねることの意味、体験を語ることの意味にも共通していると思う。このような実践の積み重ねの中より、インタビュー技術が磨かれていき、一人前より中堅、そしてエキスパートナースにまで成長していくと考える。

今後の課題

病院システムの中で家族看護をシステム化し、定着させる。

1) 看護者一人一人が「家族看護の必要性を認識する」「家族の定義を明確にする」「家族を一つのケアユ

ニットとして看護する」ことを土台として実践する。すなわち、家族看護は「看護者の役割」であることの認識の統一である。又、医師をはじめ他職種の人達にも「家族看護」に対する共通認識・協力体制作りが必要である。そして、施設内だけに留まらず施設外との連携の強化というシステム作りが必須条件であると考ええる。

2) 日常の看護に定着させるために、家族が一同に集まれる時間帯の工夫、面会時間を利用するなどして家族とのインタビューセッションを持つ。しかし、患者さんの状態、家族の状況によっては15分インタビューを積極的に取り入れていくことも必要だと考える。

臨床実践が教育・研究へと発展

実践で積み上げた事例をもとに教育に、研究へと発展させていくことである。1) ターミナル患者を抱える家族、2) 介護負担、介護をめぐる家族、3) ノンコンプライアンスの家族、4) 入院生活により強いストレスを感じている家族、5) 機能障害を起し支援関係が築けなくなった家族、6) 若年出産に伴う家族などなど…これらの事例を大切に、看護教育・研究にまで高めていくことが「家族看護学」の構築には必須条件だと考える。